

四 最初の勝利

オルレアンは、ロアアル河の北岸に地位を占めて居る堅牢なお城^{けんらう}で、外郭は南岸にまで跨^{またが}つて居りました。その間は大きな橋でもつて連絡を取り、橋の南にはツウレルと稱^よばれた堅固な堡砦^{けんこ とりで}があつて、その橋を衛^{まも}つてゐるのでございました。このオルレアンが佛蘭西の堅要地^{けんえうち}であつたことは、丁度人^{ちやうど}の咽喉のやうなものでありました。

このオルレアンにして敵に占められてしまつたならば、仏蘭西は否^{いや}でも應^{おう}でもその命脈を絶^たつてしまはなければならぬのでございまして。

しかもそのオルレアンの防備に重要な、ツウレルの堡砦^{とりで}さへ、今は英軍の占領するところとなつてしまひました。それによつていやが上にも敵軍の元氣を増したばかりでなく、味方はまた更に勇氣を沮喪^{そさう}しなければなりませんでした。それこそ奇蹟でも現はれなければ、勝つ見込みのない戦さに疲れ果てた守備兵は、饑餓^{きが}と戦ふのが精^{せい}一つぱいの力でございました。援軍を乞ふためにシャルルの許^はへ派^はせられた議員達は、その嘆願を退けられて徒手^{からて}で戻つて來ました。

それが最後であつた唯一の光明も消えました。守備兵は市民に取つて、この上ない失望があつたでございましたか？

古く由緒ある市の、勇敢な祖先の追想も、現在の悲運には何の甲斐もなく見えました。多くの生命のために、降伏の恥辱を忍ぼうか、力の盡きる限り死守して、斃れるまゝに斃れようかと、失望の悲哀の中に迷つて居た市民は、絶望の最後の一時に至つて、思ひもかけない光明に救はれました。

それは神より遣はされ、聖者に導かれた少女ジャンヌが、オルレアンを救ふために、今その途中にあるといふ噂さでございました。

市民は首を長くしてジャンヌの到着を待ちわびました。如何にそ

の歓迎の心もちを表はしたらいゝかに苦しんだほど、市民がジャンヌに對する期待は熱烈でございました。

ジャンヌが今オルレアンの城外に達したといふ知らせを聞いた市民は、あだか うしほ恰も潮が寄せるやうに、としより老人といはず、たいまつ女子供といはず、手に松明をともして、城門をさして走りました。

白馬にまたが跨り、せいぎ たづさ聖旗を携へたジャンヌは、あらゆる地上の聲を集めたやうな歡呼のくわんこ中を、守備の將軍に導かれてかつく憂々と城門を入りました。『まるで天使のやうだ！』と群衆の一人が言ひました。『さうだ、

まるで天使だ！』とまた一人が和しました。ジャンヌを見ようと揉み合ふ人波は、はたくと夜風にひるがへ翻る聖旗のかげに、燃え上る火把あが たいまつ

の光りに照らし出された少女の輝く面おもてを見ました。その眼は愛に満ち、その唇は神の救ひを語るやうに見えました。市民は酔よふたやうに我を忘れて、その後つに蹠ついて歩きました。

ジャンヌを迎へたオルレアンは、もはや救はれたも同様な安心のうちたむに、屯たむろの兵を残して夜の眠りについてゐました。市民は久しぶりな安かさをもつて渴望かつぼうしてゐた平和を夢みてゐる頃、ジャンヌは宿舎の褥しとねを蹴はつてがはと匆はね起きました。

『わたしの従者じゅうしやよ！ わたしの友は今敗まけようとしてゐる！』

遙はるかなものゝ喚おめきが、澄んだ眞夜中の空氣を傳つたうて聞えるやうでもあります。ジャンヌが武装をしてゐる間に、通街とほりで、仏蘭西人が

敗北してゐることを叫ぶ者がありました。ジャンヌは心急きながら戸外に出ました。此時闇やみの中を慌だしく驅かけて來る人影がありました。が、ジャンヌはすかさず、『おゝ好い人よ、佛蘭西人が血を流してゐることは、決してわたしに言やるな！』

言ひ捨てゝひらりと馬上に跨り、從者が捧げる聖旗を取り上げて、城門目いっさんがけて一散に馬を驅かけさせました。

蹄ひづめの音はこつくと軽く響きました。今や城門を出ようとした時、一人の負傷者が擔かつぎ込まれるのをジャンヌは見ました。『あゝ、わたしは今初めて佛蘭西人の血を見る！』その血に刺戟しげきされてジャンヌは、ゆるめた手綱たづなを引締めて驀然まつしぐらに星明りの中に突進しました。

シャルルの許もとから、悲痛な決心をもつてオルレアンに取つて返したデュノア伯はくは、人知れず戦死の覺悟で、自分の軍隊を擧あげてその夜の突撃を試みたのでございました。それはジャンヌの到着に先だつこと、ほんの僅わづかの間でございました。

サン・ルウンの砦とりでに向つて挑んだ戦たたかひは、敗まけ軍いくさをもつて初はじまつたやうなものでありました。進むところに敵の軍勢ぐんぜいは群むらがり、向ふところ到手強てづよい英兵の反抗を受けました。撃てば退けられ、突けば刺され、刻々に増して来る敵勢は、それだけ烈しげしく繁しげくなつて来る彈丸たま

數^{かず}や矢^やの雨^{あめ}にも知られました。彈丸^{だんがん}は頭上^{かす}を掠^{さら}めて飛^とんで、後に續^{つづ}いた佛兵^{ぶつへい}の胸^{むね}に食^くひ入り、矢^やは太股^{ふともも}を貫^くいて人の叫^{こゑ}びを残^{のこ}しました。劔^{つるぎ}を振り翳^{かざ}して進^{すす}む姿勢^{しせい}が、十步^{じゅうぽ}にしてはたと倒^{たふ}れたあとに、生きものゝやうな唸^{うな}りをたてゝ飛^とんでくる矢^やが、所嫌^{ところきら}はずその肉^{にく}に刺^さりました。楯^はに跳^はね返^{かへ}る矢^や、地^ちを穿^{うが}つ彈丸^{だんがん}、叫喚^{けうくわん}は雲間^{うんかん}に漂^{ひら}ひ、呻吟^{しんぎん}は地上^{ちじょう}を這^はひ廻^{まわ}るのであります。

兜^{かぶと}の緒^{いと}をきつく締^しめて、ゆつたり馬上^{またが}に跨^{また}つたヂュノアは、ありたけの力^{ちから}を振り翳^{かざ}す劔^{つるぎ}に籠^こめて、そこに驅^かけこゝに驅^かけして全軍^{せんぐん}を指揮^しして居^ゐりました。戦^{いく}さに眞劍^{しんけん}でない戦^{いく}さはないであらうけれど、これを最後^{さいご}と覺悟^{かくご}したヂュノアの決心^{けっしん}からは、實^{じつ}に火花^{火花}が散^ちるやう

な烈しさが流れ出るのをごさいました。思はずたじろぐ味方の兵卒を叱咤しつたする聲は憤りこゑに枯れ、その眦まなじりは怒りに裂けて居りました。絶体絶命に引返す兵卒は、デュノアの目の前に、槍に足をすくはれてのめつて斃たほれました。

遮しやにむに二無二切り進んで來たデュノアは、ふと我にかへつたやうに馬の足をとめてふりかへつて見ました。そこには思ひもかけず味方の勢が、と思ひの外ほか、敵はその背後にも迫つてゐたのでございます。愕然がくぜんとして夢からさめたやうにつつたつたデュノアの前に、もはや退く道は絶たれてしまひました。やがて、それこそわが望むところと、猛然まうぜんとして馬の首をたて直した時、ふと胸奥むねのおくをかすめて去つた

考へが、デュノアのその勇氣を鈍^{にぶ}らせてしまひました。軍勢として
は少くとも、生命としては澤山な生命が、まだそこらに生き残つて
居りました。さうしてそれは、たゞ一つの降服によつて救はれなけ
ればならないのでございました。

猛々^{たげ}しいばかりが武士の心ではありませんでした。自分一身を
潔^{いさぎよ}くするために萬卒^{ばんそつ}の生命^{いのち}を絶たうか？ 多くの魂^{あわれ}を憐み尊んで
わが名を耻辱^{ちじよく}のうちに葬^{はふむ}らうか？ デュノアの心は亂^{みだ}れました。

大將の叱咤^{しつた}がゆるむと共に、ぢり／＼と追ひつめられて退く味方
の兵を、背後の敵はまた勢ひ新しく攻めかけて、たちまちに倒れる
人影が、デュノアの前にどうと音をたてました。デュノアの決斷^{けつだん}は

瞬時えうも早いのを要えうしました。さうして掻かき撈むしられるやうな胸の痛さに狂くるほしく、デュノアがあはやその兜かぶとの緒をに手をかけようとした時！

『進め！ 進め！』

それは雲おこから起つたか、空から響くかと思はれるやうな、朗ほがらかな指揮の聲が、佛蘭西兵の聾ろうした耳にひびいて來ました。

『進め！ 佛蘭西の兵達へいだち、味方はもはや勝利なるぞ！ 神の少女をとめは汝等なんじらを導くであらう！ いざ續け！ 進め！』

デュノアは遙かな聲の方に驚かされた瞳こころを凝こらしました。その時さつと目を射いつた光りが、一瞬の間佛蘭西の全軍に輝き渡つたかと思

ふと、蹄うづめの音高く一騎の白馬が、驀然まつしぐらに此方をさして飛んで来るのでございました。

『進め！ 進め！ 神の救ひは汝等の劔けんにあるぞ！ いざ、神の使ひの少女に續け！』

我にもない力に動かされて、デュノアは眞つ先に少女の後に續きました。

亂みだれた軍勢の中に、そこに駆け、こゝに見えする白馬の上に、聖旗せいきを打振うちふりく勵はげます少女の姿は、不思議な勇氣を佛蘭西兵あたに與へました。槍を持ち直して突き入る者の後に、傷きずいた者までが起き上つて、投げ捨てた劔を拾ひ上げながら續きました。

この盛りかへした勢ひに面喰つた英兵は、更に、さながら軍の神
のやうに縦横無盡に白馬を蹴る少女の姿に驚きまどつて、蹄の下に
踏み潰され、今の今まで勝ちほこつた敵兵は、目の前に起つた奇蹟
に怖ぢ恐れて、浮足たつて逃げ出すのでございました。

無數な死傷を残して占領されたサン・ルウンの堅壘に、ジャンヌ
の聖旗は翻り、その白百合は白雲の空に微笑んでゐました。デュノ
アは跪いてジャンヌの手を取つたまゝ、感極まつて暫しは言葉も
ありませんでした。

『おゝわたしの友！ あなたは誰よりもまづ神に感謝しなければな
りませぬ！　そして以後は無謀な攻撃をお謹みなさいませ。何故と

いふのに、神の議し給ふところは、この地上の如何なる人のよりも最善の軍略なのですから。』と、ジャンヌは謙遜に、また少女らしいもの優しさをもつてデュノアに言ひました。

デュノアは、劔に盟つて、以後忠實な嬢の腹心であることを言明しました。兵卒達はその周圍に奇聲を揚げて躍り廻り、傷の痛みや激しい疲れを忘れたのでございました。

この第一の戦捷はオルレアン市民を熱狂させ、ジャンヌに對する彼等の信用を一層強くしました。寺院々々の鐘は鳴り響き、戦捷を祝ふ宗教的の儀式は嚴かに行はれました。

【入力者注】（頁・行は底本のもの）

73-4 何の甲斐もなく ↓ 何の甲斐もなく

77-6 敵の軍勢は群がり、 ↓ 敵の軍勢は群がり、
ぐんぜん むら ぐんぜい むら

77-7 反抗を受けました。 ↓ 反抗を受けました。
はんかう はんかう

公開：令和三(2021)年八月二一日

改訂：令和五(2023)年三月七日